喘息患者の学校生活に関する保護者へのアンケート調査
（心身障害児の運動指導、生活管理に関する研究）

大山建司
隈部桂子

要約：
小学生から高校生までの喘息患者を持つ保護者に対して、学校生活上の問題点についてアンケート調査を行った。その結果、学校側の喘息に対する理解が不足していると感じている保護者が約半数いることが明かとなった。また、医師の指示以外で給食、体操の制限を受けている児童がかなり存在することが明かとなった。このことは、学校側の喘息に対する理解不足も関係していると推測される。今後、教員を対象とした慢性疾患の勉強会等を定期的に開催するようなシステム作りが重要である。

見出し語：
喘息　学校生活　運動指導　アンケート調査

喘息患者の保護者に対して、学校生活上の問題点についてアンケート調査を行い、今後喘息患者の生活管理、運動指導に当たり、どのような点を改善していくべきかを検討した。アンケート調査の内容は食事、運動、課外活動に関するもので、具体的な内容は結果に示す。

（対象）

アンケート調査に応じて下さった保護者は77名で、その内67名が母親であった。患者の住所は山梨県49名、東京都25名、神奈川県3名であった。患者は小学生58名、中学生7名、高校生12名である。年齢は6-18歳（平均10.4歳）、男50名、女27名である。

（結果及び考察）

1. 病気に関する学校の理解度に関して（表1、問1、2、3）

保護者の49％は"学校は理解している"と答えていた。"いいえ"が11％、"どちらとも言えない"が40％であった。後二者51％（39名）の中の31％（24名）がその理由として"学校関係者の喘息に対する理解が不足している"と答えていた。また学校により良く対応してもらうために最も必要なこととして、"学校の先生と家族の話し合いの必要性"を65％以上の保護者が訴えていた。学校の先生と家族の話し合いの必要性に関しては、喘息に関して学校が理解していると答えた保護者も、そうでないと答えた保護者も同様に高率に訴えていた。主治医と学校側との話し合いについては15％位の保護者が必要と訴えていた。一方、校医への相談はほぼ全例で必要性を認めていなかった。喘息は慢性疾患の中でも頻度の高い疾患であるにもかかわらず、学校側の理解不足を訴えている保護者が約半数もいることは、学校での生活管理上問題で

山梨医科大学小児科

ある。喘息は個人差が大きいため、その対応は必ずしも容易ではないが、後述するような”学校側の要求による不必要な制限”を加えられないように、疾患への理解を深めていく必要がある。そのためには校医の役割を拡大して、通常の学校生活においても適切な指導が行われるような体制を作っていくべきである。少なくとも小、中学校の校医は小児科の専門医としていくべきであろう。

養護教諭、担任の先生への医学教育なども定期的に行うような体制を作っていくべきである。養護教諭の側からは、学校生活に必要な医学知識を得るための勉強会を求める声が多く聞こえている。

2. 給食について

喘息患児の18%（14名）が給食の制限を受けていた。その中で医師の指導によるものは3名のみで、他は学校の要請によるものであった。しかしこのことに対する保護者の不満は殆ど無く、問題意識は低いようであった。

3. 体育の授業について

体育の授業について制限を受けている患児は18%（13名）存在した。その中で医師の指導によるものは4名のみで、他は親の希望または学校の要請によるものであった。給食の場合と異なり、親の希望による制限が半数を占めていた。このことは、学校の喘息に対する理解不足を訴えている中には、親の疾患に対する理解不足が原因となっている場合もあることを示唆している。

給食、体育の制限は児童にとって大きな精神的ストレスとなるため、極力制限をしないように努めるべきであるが、実際には喘息への理解の不足、或いは喘息の悪化に対する過剰防衛等の理由から、不必要な制限を加えられている場合が少なくないと考えられる。学校生活における不必要な制限に関しては、養護教諭、担任教師からの意見も調査する必要があり、安全で快適な学校生活のための今後の検討課題である。

4. 遠足、宿泊行事について

遠足、宿泊行事には、条件付きを含めると大部分の患児が参加しており、大きな問題は無いと考えられた。

5. 病気が悪化した場合の責任について

学校で病気が悪化した場合の主たる責任は誰にあるか、との問に対して92%（72名）が保護者に有ると答えており、学校に有るは6%（5名）であった。喘息の発作を予防することが困難な場合が少なくない中で、主たる責任が学校に有ると考える保護者が6%というのは、我々の当初の予想よりは低値で有った。学校の責任に対する、保護者の認識と教員の認識に差の有る可能性もあり、それを確認するためにも教師を対象とした調査がひつようである。

表１　病気についての学校の理解

問１、子供の病気について学校は理解していると思うか

はい	49%
いいえ	11%
どちらとも言えない	40%

問２、どのような点で理解してないと思うか

学校関係者に病気の知識が不足している	31%
必要以上に学校生活を制限する	6%
健康児と同じように扱われる	19%
状態が悪くなったときの対応が悪い	16%
何か有るとすぐ病気に結び付ける	16%

問３、学校により良く対応してもらうために最も必要なことは何か

学校の先生と家族の話し合い	63%
主治医による学校の先生への説明	16%
校医による相談	3%
養護の先生の指導	14%
保健室の充実	9%

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:
小学生から高校生までの喘息患者を持つ保護者に対して、学校生活上の問題点についてアンケート調査を行った。その結果、学校側の喘息に対する理解が不足していると感じている保護者が約半数いることが明かとなった。また、医師の指示以外で給食、体操の制限を受けている児童がかなり存在することが明かとなった。このことは、学校側の喘息に対する理解不足も関係していると推測される。今後、教員を対象とした慢性疾患の勉強会等を定期的に開催するようなシステム作りが重要である。